



小山 剛さん

(社会福祉法人長岡福祉協会
高齢者総合ケアセンターこぶし園 総合施設長)

—地域の拠点となるサポートセンター—

法令によって課された業務をこなすだけでは、利用者の本当のニーズを満たすことは難しいものです。そこで、「特区」申請して100床という大規模施設を、定員15名規模のサポートセンターという地域分散型施設に解体してきた小山剛さんに、今後の施設の目指すべき方向についてお話をうかがいました。

以前、こぶし園は定員100床の大規模施設でした。どうしても利用者の生活は施設内で完結してしまうがちです。どんなにケアを工夫しても閉塞感は拭えなかったのです。

小山さんは解決策を求めて、勉強会を繰り返しました。勉強会では、施設に出向くのではなく、施設外に場所を設けて、施設から地域にサービスを分散することなどが報告されました。そこで小山さんは、地域でいくにとどまらず、「地域の中にあら小規模施設」を構想到了のです。これが、「サポートセンターとして結実化しました。

—サポートセンターとは一体何かについて、簡単にお説明ください。

「要介護状態になると、人里離れた大規模施設に収容される」ということが強いられてきた過去があります。そこで、50人や100人などという定員枠がある制度上の取り決めを「特区」という形で取り払い、地域の小規模施設として解体してきました。しかも、入居者だけでなく、地域を支える役割を担う意味で、「この小規模施設をサポートセンター」と命名しました」(表1)

—サポートセンターなど、従来の枠にあてはまらないサービスを開拓してきた小山さんは、社会福祉法人の役割について、あらためてどのように考えますか。

「私たち社会福祉事業の従事者は、決められた日の前のサービスを提供するだけではなく、利用者のニーズを敏感に感じ取り、必要なサービスを創設することも大きな役割だと思い、今日まで活動してきました」

表1 サポートセンター美沢(2006(平成18)年3月20日開設)	
地域密着型老人福祉施設	定員15名
短期入所生活介護	定員3名
小規模多機能型居宅介護	登録定員25名:通い15名・泊まり9名
配食サービス	3食365日対応



従来型の特別養護老人ホーム利用者を、それまで暮らし続けてきた地域に戻す施設として2004(平成16)年に内閣府に構造改革特別区として申請、既存施設の地域分散の先鞭であり、地域の生活者を共に支援するために小規模多機能事業を併設した分散モデル第1号であるサポートセンター美沢



分散モデル第2号であるサポートセンター千手(2009(平成21)年6月開設)では、地域の高齢者だけではなく共に暮らす地域の住民(大人・子ども)も共有するスペース(キッズルーム・カフェテラス)を併設した



2010年7月に開設された分散モデル第3号であるサポートセンター摺田屋では、特別養護老人ホーム各室の玄関を外向きに設定、通常のアパートと同様に外からの出入りを可能にした

一方、在宅介護の限界を感じている家族介護者は、「施設を利用したい」という意向は依然として強いようです。

—施設サービスが不十分だという指摘があるなか、なぜ施設入居を希望する家族が多いのでしょうか。

「在宅サービスの多くは措置時代と同様に家族介護を原則にこれを補填するレベルにとどまっています。それ回避する唯一の存在として、施設は位置づけられてしまっているのです」

逆に、何とか施設に入居できても「ここはイヤー家に帰りたい!」などと訴える利用者を何とかなだめながらして段々と慣れていた大しくありません。

「避難を目的としている施設がまだまだ存続している理由は、在宅生活を十分に支えるサービスを提供してしまっているのです」

提供していない」とあるわけでは、決して施設が求められているわけではありません。在宅サービスを徹底して整備して、それでも足りないことがあるなら、それを施設が社会のsafety net(安全網)として担当するのであって、現在は在宅サービスを提供しないで、避難民を作っているような気さえします」

—在宅生活を十分に支えるサービスがないなか、「緊急避難」としての施設入居申請があるということですね。

「在宅生活を支えられない脆弱なサービスしか提供されないから困っている介護者たる家族がいるということで、本来の意味は施設待機者ではなく、「在宅生活困窮者」が正しいと思います。困つてはなく、在宅生活の継続に支援が必要だと思います。困つてはです。施設に入りたくて待っているのではなく、在宅生活を支えるために施設を増やす」といってます」

進化し続ける実践

写真で示したように、分散モデル第1号である「サポートセンター美沢」に引き続き、第2号である「サポートセンター千手」では、キッズルーム・カフェテラスが設けられています。

さらには、分散モデル第3号である「サポートセンター摺田屋」では、特養部門の各室の玄関を外向きに設定し、外からの出入りを可能にしています。

これらは、職員のアイデアを少しずつ積み上げてきた結果だそうです。こぶし園では、このように、職員のアイデアを最大限採り入れる姿勢で運営に臨んでいます。

日々のケアの研鑽はもちろん大前提ですが、サービスを展開するにあたっての環境や仕組み作りに、職員自身の斬新なアイデアが受け入れられる土壤があるからこそ、地域の拠点となる生き生きとした組織作りが形成されてきたのではないでしょうか。

プロフィール

小山 剛(こやま・つよし)さん

1977(昭和52)年、東北福祉大学卒業。知的障害児施設「あけぼの学園」・重症心身障害施設「長岡療育園」の児童指導員を経て、社会福祉法人長岡福祉協会・高齢者総合ケアセンターこぶし園に主任生活指導員として勤務。現在、同センターの総合施設長・同法人の理事・執行役員。